

## 甲状腺外科草子 4

### 優しい外科医 パレ

杉野 圭三

アンブロワズ・パレ (Ambroise Pare, 1510? - 1590) はパレ全集 10 巻などを著し近代外科の祖と言われ、外科学の飛躍的發展をもたらした。



アンブロワズ・パレ パレ全集 1564 (慶應大学所蔵)

パレは 1510 年頃、フランスのブル・エルサン村 (現ラヴァル市) で家具職人の息子として生まれ、1533 年頃から 3—4 (?) 年間オテルデュー病院 (7 世紀ごろ創立され、現存するパリの中央病院) で理髪 (床屋) 外科医として見習いを行った。その時に多数の患者診療と死体解剖で外科学を学んだと『弁明と旅行記』の中で述べている。しかし、貧乏なため理髪外科医師団の正会員試験を受けられず、軍医として 1536 年のトリノから 1569 年モンコントゥールまで、イタリア戦争・宗教戦争など多数の戦場で多くの症例を経験し、ついに国王の首席外科医を務めるようになった。

それまでの銃創処置は焼灼や傷口に煮えたぎった油を注いでいたが、パレは卵黄、テレピン油などを混ぜた膏薬塗布を開発し、患者の痛みも少なく治療成績が向上したとされる。また、血管結紮法は外科手術手技向上に飛躍的進歩をもたらした、近代外科の礎を築いたといえる。



パレ火縄銃その他による 創傷の処置法 1551 の扉絵  
パレ人間の頭部外傷と骨折の 治療法 1561 扉絵

1559 年夏、フランス国王アンリ 2 世の王女エリザベートとスペイン国王フェリペ 2 世の結婚を祝う馬上試合が行われ、出場したアンリ 2 世は折れた槍が左目に刺さり 10 日後に悲劇の死を迎えた。この時に、パレとアンドレアス・ヴェザリウスが呼ばれ病床で対診を行ったとされる。解剖学と臨床外科の 2 大巨頭の議論がいかなるものであったかという記述がないのが残念である。

その後出版された『人間の頭部外傷と骨折の治療法』にはヴェザリウスの解剖書ファブリカの図譜が多数掲載されており、実りの多い交流があったものと推察できる。

『弁明と旅行記』の中でパレは『われ包帯するのみ、神が癒したもう』という有名な言葉を残しているが、同時に別の記述もある。『神のお陰でいつも皆に大変評判がよく、同業者の間では決して人に劣る評価を得たことがない。私の手当や診察なくしては病の治癒はあり得ないとまで言われた』

謙遜だけではなく強烈な自負の表現である。一度はこのような見得を切ってみたいものである。

参考文献:

ヌーランド。医学をきずいた人々。河出書房

アンブロワズ・パレ没後 400 年記念会実行委員会編: 日本近代外科の源流。メディカル・コア、1992。

( 一 甲状腺外科医の徒然なる随想 )

2021 年 10 月 26 日